

01・怪しい薬を浴びたので、催淫状態などになる

『ミネルヴァさんの実験台』とは別の世界線。

クロエと主人公が交際・同棲している世界。

外は雨。18時ごろ。

主人公、外からあわてて帰ってくると、大急ぎで布団に入り、あたかもずっと寝ていたかのようなふりをしてクロエの帰りを待っている。

外へ出ていた事を知られると、色々とまずいのである。
するとそこへ、クロエが帰宅してきた。

間一髪である。

SE1 外の環境音

【最初から最後まで流す】

【繰り返し流す】

【部屋の外の音を、部屋の中から聞いている】

【0—10秒ほど流してSE2】

【その後、音量が小さくなる】

【ごく小さな音量で流す】

【トラック終了まで流し続ける】

SE2 クロエの足音1

【最初から最後まで流す】

【だんだん近づいてくる】

【『かすかに聞こえる』程度の大きさから近づいてきて、3メートルほど離れた位置でストップする】

▲ ボイス加工あり

【3メートルほど離れた位置から聞こえる】

● 正面 50センチ

「【※6回※】 呼吸する。」

走ってきた苦しそうな呼吸から、だんだんゆっくりになる。

『療養中のはずの主人公が出歩いている』という噂を聞きつけて、急いで帰ってきたの
で」

はあ、はあ。はあ、はあ。

はし。はし。

【※1回※ 呼吸する。

とてもゆっくりと。

普通の呼吸とため息が入り混じっているような感じで】

はああ……。

【少しぼかんとして。

主人公が部屋にいて、寝ている事が確認できたので。

主人公は寝ているか、まだ外にいるかのどちらかだろうと思っていたので】

……あ、起きてた……」

SE3 クロエの足音2

【最初から最後まで流す】

【だんだん近づいてくる】

【次の『クロエ』のセリフと重ねて流す】

SE4 主人公が起き上がる音

【最初から最後まで流す】

【次の『クロエ』のセリフと重ねて流す】

S E 5 クロエが目の前の椅子に腰かける音

【最初から最後まで流す】

【少し小さめの音量で流す】

【次の『クロエ』のセリフと重ねて流す】

〈主人公〉

「……お、おかえりなさい。今日もお疲れ様。
今日は早かったのね！」

▲ ボイス加工あり

【3メートルほど離れた位置から50センチほどまで近づいてくる】

● 正面 50センチ

「【少し拍子抜けしながら。

帰宅の挨拶をする。

また、いつもより帰りが早い事について述べる。

それは無論主人公のうわさを聞きつけてきたからなのだが、それについてはまだ話さない】

ただいま……。』

そー……今日は早く上がれたー……。

【優しく少し語尾が伸びた感じで。

でも心配そうに】

……身体、大丈夫ー？ 今日是一日、ちゃんと寝てたー？」

〈主人公〉

「……ええ！ ありがとう。もちろん、この通りよ」

主人公、わざとらしいながらに、必死に何事もなかったかのようにふるまう。
外に出ていたなんて、とても言えないからだ。

●正面 50センチ

「【ホッとしたように。

『もしかすると噂は誤報で、主人公はずっとおとなしく寝ていたのではないか』と、少し思い始めているので」

そっかあ……」

〈主人公〉

「言われた通り、ちゃんと寝ていたわ」

● 正面 50センチ

「【少し疑問を感じている風に。

主人公の態度が、妙に不自然で、怪しいので」
んー？」

〈主人公〉

「ええ……この通り」

しかし、相手はクロエである。

一度は誤魔化せたかのように思えたが、再び主人公を疑い始めている。

● 正面 50センチ

「【少しわざとらしく、相槌を打つ。

また『噂は本当だったようだ』と確信する。

主人公の態度が、あまりにも不自然で怪しいので」

……ほお。ほお……？

ほんとかなあ。

「自分が聞いた噂について切り出す。

本来寝ているはずの主人公が出歩き、それどころか仕事までしていたらしい件について述べる。

『リーナ』とは主人公の同僚

実はね。

『夕方頃、あなたらしき人が工房の近くを歩いてた』とか。

『リーナの代わりに接客してた』とか……。

『そのついでに、ケガしてた人の治療までやってた』とか。

あたし、色々聞いちゃって。

だから、急いで帰ってきたんだけどなあ………？」

〈主人公〉

「……あら。

それはきつと、例のわたしのそっくりさんね」

主人公、苦しい言い訳を始める。

もはや無駄な抵抗の気がしてきたが、かといってやすやすと諦める訳にはいかないのだ。

●正面 50センチ

「少しわざとらしく、相槌を打つ。

主人公がバレバレの嘘をついている事はわかっている。

だが、とりあえず最後まで聞いてあげる事にする。

必死にごまかしている主人公がかわいらしいので」

ふくん？」

〈主人公〉

「……そう。最近よく見かける、わたしにとってもよく似た方。

きっとあなたが聞いた噂は、すべて彼女がなされた事に違いないわ。

そもそも、わたしみたいな顔をした方なんて、いくらでもおられるし……。

似たような顔の方が似たような事をされていても、なんら珍しい事ではないように思うの。そうじゃない？」

●正面 50センチ

「少しわざとらしく、相槌を打つ。

すべてが口から出まかせである事を把握した上で、引き続き話を聞いてあげる」

ほお。

そおかあ。そうなんだあ……。

『そっくりさんの仕業』かあ……。

て事はそっくりさん、今日は、服まであなたと似た感じにしてたんだねえ」

〈主人公〉

「えっ？

あつ。……へええ、そうだったの……！

わたしたち、とっても気が合うみたいね」

●正面 50センチ

「『にやにやとわざとらしく、相槌を打つ。』

主人公の必死の嘘が面白くなってきているので」

ねええ……？ あなた達って、本当に気が合うんだね。

何から何まで一緒で。

他の人には見分けがつかない程同じとか、なんか妬（や）けちゃーう」

〈主人公〉

「そうそうそう。そうそうそう。」

きつと直接対面したら、わたしたちきつと友達になれるに違いないわ」

うーん、苦しい。すでに茶番である。

主人公、にやにやとこちらを見つめるクロエに向かって、何度もこくこくと頷く。すでにもうバレバレな事くらい、主人公にもわかつている。

だが、後に引けなくなってしまったのだ。

● 正面 50センチ

「【にやにやとわざとらしく、相槌を打つ。

主人公の必死の嘘が面白くなってきているので】

そうだね。

もしいつかあなたと彼女が対面したら、親友になれる事間違いないし。

リーナも、彼女が見た目だけじゃなく、中身もあなたに似たとってもいい人だから、とても助かったみたい。

【少しトーンを普段の状態に戻して。

リーナというのは主人公の同僚。

身重で仕事を続けているので、一部の作業ができない。

その為主人公が助ける事が多い。

主人公が無理を推して出勤したり抜け出したりしているのは、彼女を手伝うためという側面が大きい。

そのため、リーナはとても主人公に感謝しているのだ。

その件については、真面目に伝えたいのだ。

また、これはクロエが怒るに怒れない要因にもなっているのだ」
でも、心配してたよ？」

〈主人公〉

「え？」

●正面 50センチ

「少しトーンを普段の状態に戻して。

リーナからの伝言を述べる」

だって、リーナは彼女を、完全にあなたと勘違いしてるからね。

『手伝ってもらえて、とても嬉しかった。でも、この前の薬の件があるのだから、どうか無理はしないでね』って言った」

〈主人公〉

「あら……。それはありがたい心遣いだわ。

人違いをされているのは、なんだかそっくりさんに申し訳ないけれど……」

● 正面 50センチ

「トーンを普段の状態に戻して。

優しく、心配した声で。

動揺する主人公がかわいくてしばらくからかってしまったが、主人公の体調についてはとても心配なので」

……で、どうなの？ 調子は。

痛いとか、苦しいとか、しんどいとか、ない……？」

〈主人公〉

「えっ？ えーつと……そうねえ……。

……まあ、大丈夫だと思うわ。

このまま寝てれば、いずれ全部抜けれると思う」

● 正面 50センチ

「【※息遣いのみ※】で表現する。

『ふーん？ 本当にそうかな？』という感じで」

……。

【ひとまず相槌を打つ。

主人公の主張については疑問があるが、ひとまず全部話を聞いてから、今日伝えようと思っている件を切り出したいので」

……そっかあ。

【※息遣いのみ※】で表現する。

小さく息をつく】

……。

【もう一度同じ言葉を繰り返す】

そっかあ。

なら、いいんだけど……」

〈主人公〉

「ええ。先生も、かぶった薬の組み合わせからして、人体に大きな支障はないはずだとおっしゃっていたし。

このまま何事もない事を祈るしかないわね」

● 正面 50センチ

「【少しわざとらしく。

真相を知った上で、主人公に合わせているので
なるほどねえ」

〈主人公〉

「そう。祈りましょう？ このまますべてが無事に済む事を……」

● 正面 50センチ

「【少しわざとらしく。

真相を知った上で、主人公に合わせているので
ふむ。

【普段のトーンに戻って。

実際がどうあれ、主人公にはまた休息が必要なので
まあ、あと何日かは寝てようね？

【※息遣いのみ※ で表現する。
一息つく、という感じで。

※重苦しいトーンにならないようにお願いします※】

……はー……。

【数日前の出来事について述べる。

それは、主人公が、落下する薬品の入った箱から少女を守った時の事である。

主人公は無事に少女を守れたものの、様々な種類の薬品を頭からかぶってしまった。また、ガラスが割れた事で軽いけがを負ったので、労災という事で、しばらく療養する事になったのである。

もっとも、主人公はしょっちゅう抜け出しては仕事をしたり、人助けをしたりしているのだが……】

まさか工房にあった薬、あの量被っちゃうとは思わなかったよねえ……。

【医者が発言について述べる。

クロエにとって、現状があまり安心できるものではないので。

医者は主人公の状況について、あいまいな表現で隠しているように思えるので】
でも、お医者さんはそういう風に言うけど。

妙に気になる言い方するよね。

『被った薬の組み合わせからして、毒性のある反応は起きないだろう』

『人体に深刻な影響はないはず』

って事はさあ。

毒性以外の反応とか、人体に多少影響ある事は起きるかもしれないって事にならない？」

〈主人公〉

「……まあ、そうねえ？」

SE 6 クロエが布団に入ってくる音

【最初から最後まで流す】

【一気に近づいてくる】

クロエ、布団に入った事で、距離が近づく。

●正面 15センチ

「優しく、でもはっきりと主人公に言い聞かせる。

主人公はどうにも、自らの病状を軽視しているように思えるので】
とにかく今のあなたは

『事故により、工房の魔法薬を大量に浴びた労災状態』

『いつ何が起きてもおかしくない、不安定な身体』

ってやつなんだから。

【優しく念を押す。

また、周囲がいかに主人公を心配しているかについて述べる】

少しでも『何か変だな』『困ったな』って事があったら言ってる？

みんなあなたの事、すごく心配してるよ。

あなたが助けたあの女の子の為に、しっかり療養して。

異変が起きたら治療するし、異変がなくなるとも休んで。

早く元気になったところを見せてあげようね」

〈主人公〉

「……ええ。

あなたのおっしゃる通りね。

ありがとう。そうさせてただくわ」

● 正面 15センチ

「【にっこりと。

主人公の理解が得られたようなので】

そう。わかってくれて嬉しい。

【少し間をあけてから。

今日、最も話したい事を切り出す。

少し訝しがっている感じで。

しかし、深刻な雰囲気ではなく、少しコミカルに」

でもさあ……」

〈主人公〉

「うん？」

クロエ、『左0センチ』の距離まで移動して『無声音ささやき』をする。

●左 0センチ 『無声音』ささやき ※マークのセリフまでささやく

「さらっと、ひそひそと。」

まるで当然の事のように、はつきりと確信を持って言う」

でも。ほんとの事を言うと。

……実はもう起きてるんでしょ？ 異変」※

〈主人公〉

「んん？」

クロエ、『左0センチ』の距離まで移動して『無声音ささやき』をする。

● 左 0センチ 『無声音』 ささやき ※マークのセリフまでささやく

「さらっと、ひそひそと。」

まるで当然の事のように、はっきりと確信を持って言う」

あたしには。……っていうか、誰にも言えてないんだろうけど。
すでに起きてる異常。あるよね？」※

〈主人公〉

「えーっと……」

まずい。話が良からぬ方向に転がってきた。

主人公、思わず目を泳がせるが、そんな主人公に、クロエはキスをする。

● 左 0センチ

「※1回※ 左耳にキスする。

軽く触れるだけのキス」

ちゅ」

クロエ、会話をする為に少し離れる。

● 正面 15センチ

「優しく、でも有無を言わせない口調で。

今日という今日は主人公に真相を話してもらうつもりで、クロエは帰宅したので」
ごめんね。わかってる。もう隠さなくていいから」

〈主人公〉

「……………」

● 正面 15センチ

「優しく気遣うように。

また、主人公の容態について自分の推論を述べる。
最大気遣った表現で、だが確信をもって話す」
わかってるよ。

本当は……薬を被った日からなんだか全身熱くて。

変な感じなんでしょ？

他は何もないから……一応普通に暮らせてるけど。
だけど実は、かなり困ってる。
そうでしょう？」

〈主人公〉

「身に覚えがないわね……」

● 正面 15センチ

「優しく氣遣うように。」

また、主人公の容態について自分の推論を述べる。
最大氣遣った表現で、だが確信をもって話す」

『身に覚え』……？ あるよね。

少なくとも、あたしにはあるよ。

【優しく、でもちよつと呆れたような感じで。

『まったく、ここまで言って尚しらばくれるつもりか』と思っているので
匂いでわかるもん。

【ぼそつと。

この事態に気づいたのは、今日ではないので
ていうか……前から知ってたし」

〈主人公〉

「……………えっ？」

● 正面 15センチ

「【※小さく息をついてから※ 話す。

優しく、でも少し申し訳なさそうに。

実は少々呆れている気持ちもあるが、それ以上に主人公の事が心配なので。

また、主人公がようやく認める気になった、あるいは、ボロを出したのでホッとしても
いる」

ごめんね。

本当はこういうの、あんまり人にバレたくないだろうし。

あたしからは何も言わず。

『相談してくれるのを待った方がいい』って思ってた。

だから、この三日位……あなたの様子を見守ってたけど……。

やっぱ、言いづらいまま一人で悩んで苦しんでるの、知らないふりとか、できない」

〈主人公〉

「……」

● 正面 15センチ

「【※小さく息をついてから※ 話す。

少し申し訳なさそうに、だが、強い意志を持って。

いつからこの事態に気づいていたのかを述べる。

また、頑固な主人公がこれ以上をしらを切り通せないように、自分の推論を話す事にする。

『現場』とは『主人公が薬をかぶった事故現場』の事』

……ごめん。もう、はつきり言うね。

ほんと現場の掃除した時から気づいてた。

あなた。被った薬の種類のうち……一個、お医者さんに一個報告しなかったのがあるでしよ。

あの、ピンク色の薬。

本当はあれも一緒に浴びてて……他の薬と組み合わせさせた事に寄って出てきた催淫性に、困ってる。よね？」

〈主人公〉

「……………」

あつ、もうダメだ。

主人公、ギリギリ黙秘しつつも、ほぼ観念する。
ここまでか、というやつである。

● 正面 0センチ

「優しく諭すように。

クロエとしても、これ以上この件を長引かせたくない。

そろそろ主人公に認めさせて、次の段階に移りたいので」
……困ってる、でしょ？」

〈主人公〉

「はい……………」

● 正面 15センチ

「ほっと息をつく。

ようやく主人公が認めたので」

……ふう。

【明るく、優しい声になって。

ひとまず第一の関門を突破したので】

やっぱり。

やっっぱそうだったんだね？」

〈主人公〉

「ごめんなさい……言い出せなくて……」

主人公、もごもごと自分の指同士をつんつんさせながら、叱られた子どものようになつて謝る。

いずれバレるとはわかっていたが、いざそうなると『もっと早く正直に言えばよかった』という後悔が押し寄せてきたのである。

● 正面 15センチ

「【穏やかに優しく。

なかなか認めず、また言い出せずにいた主人公の気持ちも、クロエは理解できるのでううん。いいんだよ。言い出しにくい気持ちはわかるし。

【優しく。

主人公への共感を示し、また、早い段階で打ち明けた場合、どのような事が起きていたのかという推測を述べる。

それから、主人公の気持ちを代弁する」

こういうの、たとえお医者さんが女でもあんま知られたくないよね。

素直に言ったら、容体について色々聞かれるのは避けられないし。

あの子や、あの子の家族にも耳に入りかねないけど。

小さい子にはますます説明しにくいやつだし……。

だから、収まるまで一人で我慢しようと思ってたんでしょう？」

〈主人公〉

「……うん」

●正面 15センチ

「【穏やかに優しく、でもちよつと呆れたような声で】
やっぱりね。」

【少し間をあけてから。

今度は、とても優しく。

クロエにとって一番大切な事は、主人公が主人公らしい選択ができる暮らしを守る事なので。

そのせいで苦勞をしたり、困ったりする事もある。

だが、それでもクロエは『主人公が、主人公らしい生き方ができる環境』を守りたいので」

あなたらしいね。

【穏やかに優しく。

納得した様子で】

あなたらしくて、納得したし。

【かわいく、ちょっと呆れた感じで】

あなたらしいから、できれば見守りたいと思ってたし。

【かわいく怒った感じで】

あなたらしいせいで……ちょっとむかっている」

〈主人公〉

「……えーっと……」

しかし、クロエは優しかった。
と思ったら、やはり怒っていた。

主人公はどうしたらいいかわからなくなって、おろおろとクロエを見上げるばかりだ。

● 正面 15センチ

「かわいく怒って。

もちろん、本気で怒ってはいない感じで。

主人公の性格上、なかなか相談したがないだろう事は理解していた。

それでも恋人として、本当は主人公の方から打ち明けて欲しかったので」

だってあたし。あなたの彼女なんだよ？

『もうちよつと早く相談してくれたっていいのに』って、ちよつとは怒ってるよ。

『薬のせいで変な気分になりすぎて、色々参ってる』って、あなたから教えてほしかった」

〈主人公〉

「……ごめんなさい。

あなたに迷惑をかけたくなくて……」

●正面 0センチ

「ちよっとかわいく怒りつつも、優しく。

主人公への共感を示して。

仮に逆の立場だった場合、クロエが素直に主人公にすぐ相談できたかというところ自身がないので」

でも、言えないだろうっていうのも、やっぱりわかるから。

だからね……今日は健康調査だけで許してあげる」

〈主人公〉

「!？」

しかし、そんな主人公にクロエが取った行動は意外そのものだった。

主人公が『健康調査って?』と尋ねる間もなく、クロエが近づいてくる。

クロエ、左耳側に移動して話す。

●左 0センチ

「優しく、でも有無を言わせない感じで。

自然とセクシーな雰囲気に移行する感じで。

ここで言っているのは建前」

変な薬浴びて、今、あなたの身体がどうなってるか。

魔法薬師（まほうやくし）の資格を持つものとしては確認しておきたいし。

「ぼそっと。

こちらが本音」

恋人として……純粹に気になってるし」

〈主人公〉

「！」

● 左 0センチ

「優しく、でも有無を言わせない感じで。

さらに一段階、自然とセクシーな雰囲気に移行する感じで」

だから……秘密を作った悪いあなたに」

クロエ、『左0センチ』の距離まで移動して『無声音ささやき』をする。

●左 0センチ 『無声音』 ささやき ※マークのセリフまでささやく

「優しく、少し悪戯っぽく。

少しセクシーに、今後の展開を期待させるような雰囲気で。

※特に聞き手をドキツとさせるイメージでお願いします※」

ちよーっとおしおき……しちやおっかな？」※

ここでフェードアウトして終了。